

令和4年のアワビ漁況

1. 令和4年の漁模様

本県のアワビ漁は6～10月にかけて、主に素潜りで行われます（10月は特別採捕許可による操業）。近年は時化による高波や水色の悪化に加えて、令和2年以降の新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響等で延べ出漁日数の減少が続いておりましたが、今年は昨年よりも26日増加し、漁期全体で124日の出漁がありました（図1）。

今漁期の漁獲量は約17.0トン（前年比116%）で、震災後（平成24以降）2番目に多い漁獲となりました。1日あたりの漁獲量（kg/日）は、令和2年以降3年連続で100kgを超えており、震災後の自主的な獲り控えや種苗放流の再開によって、アワビ資源が回復してきたと考えられます（図2）。

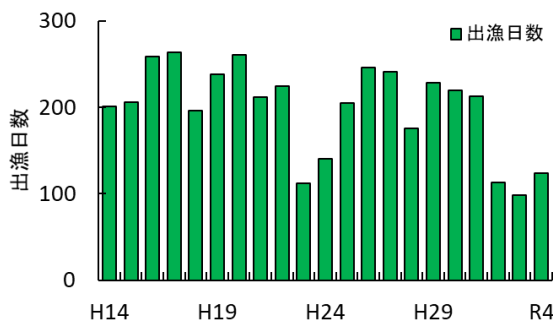


図1. 茨城県におけるアワビ漁の延べ出漁日数。
※地区ごとの出漁日数の合計

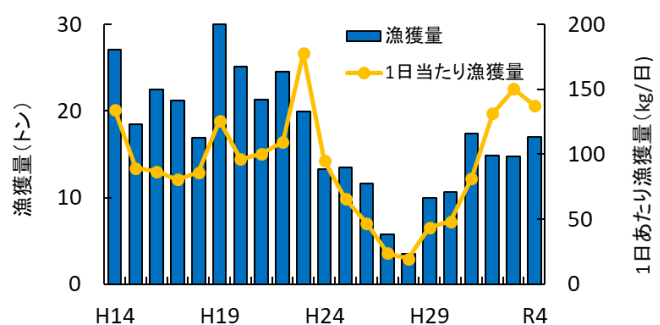


図2. 茨城県におけるアワビ漁獲量と1日あたりの漁獲量の推移。

2. 種苗放流の効果

本県のアワビ資源は天然と人工種苗（放流貝）が由来となっており、毎年約25～30万個の人工種苗が放流されています。人工種苗のアワビは殻の頂点付近（若い頃の殻）が緑色で、天然貝と見分けることができます（図3）。

水産試験場では、毎年漁獲されたアワビに人工種苗がどの程度含まれているかを調査しています。今年の人工種苗の割合は35.9%で昨年からやや減少しました（前年比91%）（図4）。なお、H27～30年にみられた低い割合（21.4～30.7%）はH23～26年に震災の影響で放流数が減少したためと考えられます（人工種苗が漁獲され始めるのは放流から約3年後以降のため）。

アワビ資源の維持・増大を図るために今後も自主的な漁獲管理や種苗放流の実施等、適切に資源管理をしていくことが大切です。



図3. 天然と人工種苗の見分け方. 人工種苗は矢印で示す殻の頂点付近が緑色になっている。

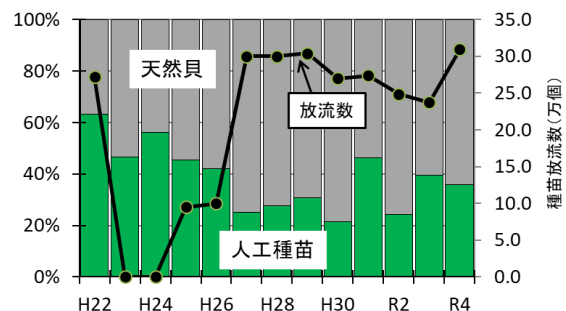


図4. 漁獲物に占める人工種苗の割合と種苗放流数の推移. 放流種苗の漁獲は放流から約3年後以降となる。

（定着性資源部 古川 洋之介）

【次回予告】 令和4年12月23日発行の水産の窓は「海洋観測結果」を予定しています。